

マタイ 7 章 1-6, 12 節 「はっきり見えるようになる」

1 節に「人を裁くな」とあります。「裁く」とは、「裁判をする」「見分ける、判断をする」という意味もあります。私たち人間は、人を批判し、悪い点、足りない点をあげて、自分は大丈夫と自分を慰めていくのです。イエスさまはそのような私たちに対して「人を裁くな」と言われます。しかし、本当の意味で「人を裁くな」とはどういう意味なのでしょう。

3～5節にあるように、人を裁くことが「兄弟の目にあるおが屑を見ること」に喩えられています。「おが屑」とは口語訳聖書では「ちり」となっていました。人の目の中の小さなちりを見つけて、指摘し、取ってあげようとする、それが人を裁くことだということです。ところがここでは、「自分の目には丸太があるではないか」と言われています。「丸太」は前の訳では「梁」でした。人の目の中のおが屑よりも、はるかに大きな丸太、梁がある、そのような者が、人の目のゴミを指摘したりできるはずはない、ということです。「人を裁くな」と言う理由は、「神さまが私たちをお裁きになる」からということです。神さまが私たちをお裁きになる、そして神さまの方を私たちが見る時に、自分の目の中の丸太に気付かされるのだと言います。神さまの裁きの前では、見るべきものを何一つ見ることができない、全く目を塞がれた者が私たちなのです。私たちの目を塞いでいる丸太。それは私たちの罪です。この私たちの罪によって、私たちは神さまから離れ、神さまを忘れ、自分の思いによって生きるのです。その罪の丸太が私たちの目を塞いでいるのです。人間が自分の目にある丸太によって目が塞がれ、神さまが分からなくなってしまう、自分が裁き手になろうとしてしまう。そのことが人間の罪なのです。

だから、私たちは、人の目のおが屑を取ろうとするより前に、自分の目の丸太を取り除かなければならないのです。私たちの目にある大きな丸太を取り除くことができるのは、神さまただお一人です。イエスさまの十字架の出来事によって、私たちの目を塞いでいる丸太が取り除かれたのです。すなわち、それは罪が赦されたということです。罪の赦しが与えられたのです。イエスさまの十字架のおかげで、私たちの目の中にあった丸太が、いかに大きいものであったかと分かります。それは丸太の大きさ、罪の大きさであります。そして、その大きな罪が主イエスの十字架によって、いかに赦されたかということが示されます。そこに神さまの恵みがあるのです。私たちはこの神の恵みによって、自分が生かされていることが見えてきます。それが見えたときに、私たちが隣人を見る目が変わります。人を裁く目から、兄弟の目からおが屑を取り除く目へと変わるのです。私たちの目の丸太を取り除いて下さった神さまの恵みが、その人にも注がれていることを信じて、その人と共にその恵みに生かされることを願い祈る目です。

そしてさらに最後の 12 節も取り上げます。12 節は、「黄金律(Golden Rule)」と呼ばれるほど大切な聖書の要約だと言われています。イエスさまは黄金律として、自分の教えとは、心の願いを解放し、いのちの輝きを生み出すことだとししました。「黄金律」を実行するために、まず私たちは大きな丸太によって目が塞がれていたということに気付くことからです。私たちがなすべきことは、私たちの目から丸太を取り除き、罪を赦して、恵みの内に生かして下さった神さまに感謝することです。そして与えられている神聖なもの、真珠を大切にしつつ、それをできる限り多くの人々と分かち合っていこうとする、神さまの恵みを多くの人へ宣べ伝えることです。